あいち国際女性映画祭 2022―映画を通して観る世界―

愛知県で毎年、国際女性映画祭が開かれているのをご存知ですか？今年で 27 回目を迎え、海外からも多くの作品が参加しています。グローバル化した現代にあっても、映画は海外の文化を知る良い機会ではないでしょうか。今号では、この映画祭の成り立ちや歴史、本年度の映画祭について紹介します。

映画祭概要

あいち国際女性映画祭は、世界各国・地域の女性監督による作品、女性に注目した作品を集めた、国内唯一の国際女性映画祭です。1996 年の初開催時以来、映画の上映のみならず、女性監督等によるトークイベントやシンポジウムを開催し、男女共同参画や国際交流に関する理解促進などの役割も果たしています。

開催期間　2022 年 9 月 8 日（木）～ 11 日（日）［4 日間］
開催場所　ウィルあいち、ミッドランドスクエア シネマ（予定）
※具体的なプログラム、チケット販売については 7 月下旬ごろの公開を予定しています。
　詳細はあいち国際女性映画祭公式ウェブサイトをご確認ください。
　https://www.aiwff.com/2022/

会場・昨年度の様子

・ウィルホール
　ウィルあいち 4 階　800 席の大規模なホールです。
・大会議室
　ウィルあいち 3 階　250 席　フィルム・コンペティションの作品上映や授賞式もここで行います。
（2020 年、2021 年の開催時には、新型コロナウイルス感染拡大防止のため客席数を半減しました。）

・ミッドランドスクエア シネマ
　名駅四丁目のミッドランドスクエア シネマでも一部プログラムを上映予定です。

▲ウィルホール（2021 年度開催時の様子）

▲大会議室（2021 年度開催時の様子）

▲ミッドランドスクエア シネマ

クラウドファンディングについて

最終支援金額　722,500 円（目標金額の 103%）
最終支援者数　延べ 101 人

2022 年 3 月 9 日から 5 月 19 日まで、「あいち国際女性映画祭を知ってほしい！映画祭予告編＆字幕製作プロジェクト」と題して、クラウドファンディングを実施しました。

当映画祭の来場客数は、新型コロナウイルスの影響やファン層の高齢化もあって近年減少傾向となっています。幅広い年齢層のファン獲得のため、映画祭の効果的な広報と、映画祭のプレゼンス（存在感）を高めるべく、映画祭の趣旨や上映作品を紹介するフェスティバル・トレーラー（予告編）と、映画祭の顔となるオープニング・クロージング作品候補となるジャパン・プレミア（日本初公開）作品への字幕製作に取り組みました。

映画

クラウドファンディングにより字幕を製作する作品は、『ギョンアの娘』（韓国／ 2022 ／ドラマ）に決定しました。

［監督及び主な出演者］
　監　督：キム・ジョンウン
　出　演：キム・ジョンヨン、ハ・ユンギョン、パク・ヘジン

［あらすじ］
　主人公のギョンアは介護の仕事をしながら 1 人で暮らしている。唯一頼りにするヨンスという娘がいるが、ヨンスとはなかなか会う事ができず、一方、ヨンスはしつこく会おうとする元カレのサンヒョンに悩まされていた。
　ある日ヨンスが突然ギョンアを訪れ、母娘は楽しい週末を過ごすが、その夜、ギョンアのスマートフォンに見知らぬ男と娘の性的な動画が届いたことから、二人の日常は大きく動き出す。

▲『ギョンアの娘』の一場面
INDIESTORY.Inc 提供

Interview☆あいち国際女性映画祭 2022　ディレクターの木全純治氏にお話を聞きました。

▲あいち国際女性映画祭 2022 ディレクター
シネマスコーレ代表取締役・支配人　木全純治氏

── あいち国際女性映画祭は立ち上げ時から関わられていたそうですが、愛知県でこの映画祭をつくられたきっかけや、その時に苦労されたことなどを教えてください。

1996 年にウィルあいちの開館記念として、財団法人あいち女性総合センター（現公益財団法人あいち男女共同参画財団）の当時の課長・大野明彦さんから映画祭立ち上げの話をいただきました。当時私が主催していたアジア文化交流祭という映画祭に、彼が観客として参加したことがきっかけだったようです。当初よりディレクターの立場で関わらせていただき、第 1 回の映画祭は成功を収めました。国内外の著名な女性監督や俳優を招待しようとしたので、大変なやり取りは多かったですね。

行政はおそらくこの映画祭を、最初は数回で終わらせる予定だったのでしょう。しかし、想像以上に多くのお客様が映画祭に足を運んでくださったこと、また、当時の職員の熱意もあり、予算を減らされる中で資金調達や運営の仕組みなどを確立し、長く続けていける土台を作ることができました。このように今日まで続けてこられたのは非常に恵まれたことであり、また大変苦労したところでもあります。

── 今回で 27 回目の開催となりますが、この映画祭を 27 年続けてきた意義はどのようなところにありますか。

1996 年当時はまだ映画界に女性監督は多くなかったです。そして 27 回続けてきてなお、映画界における女性監督は十分な力を発揮できていない状況です。多くの女性が映画に携わるようにはなってきましたが、映画界における地位や立場が未だに確立されていないことは残念で、この映画祭が果たすべき役割がより一層求められていると感じます。

── アジアや中東からの映画も多く参加されていますが、26 年の間にどのような変化がありましたか。

中国や韓国との関係は開催当初から濃密に続いていますし、個人的にも、アジア映画への親近感はとても持っています。アジア映画は 1980 年代半ばから 2000 年代にかけて、中国、香港、韓国と、それぞれの国の勢いに応じるように盛り上がりを見せ、世界的に認められる時代になってきました。ただし女性監督の立場は低く、昨今盛り上がりを見せる韓国映画界でも、女性監督はまだまだ少ないです。韓国の女性監督の置かれている立場は日本とよく似ていると思います。ただし、韓国では女性プロデューサーの活躍が特筆されます。

── ヨーロッパと比べて、アジアの女性監督は少ないですか。

ヨーロッパでも似たような状況だと思います。社会主義の中国などでは比較的女性監督は多かったのですが、独立採算制になってからは、女性監督の出番は少なくなりました。女性監督に大作を任せない、女性監督への投資をしない、という雰囲気は世界的に見られます。女性監督は、日本では女性の政治家と同じ程度の割合しかいないと思います。そういう視点では、ヨーロッパの方が女性監督の割合は多いかもしれませんね。

── 国際理解の推進や多様性社会の創造のために、映画の持つ力、可能性についてどのようにお考えでしょうか。

映画は「2 時間の娯楽」です。しかし、その 2 時間を映画館で過ごすことにより、その国の文化や風俗、習慣、社会問題などを自ずと知ることができます。とても垣根が低く、娯楽を通じて世界に触れることができる、素晴らしいメディアだと思いますね。

── 今回、この映画祭を通じて伝えたいメッセージを教えてください。

まだまだ世界の映画界における女性の立場は弱いと思います。より多様性を発揮できる環境や、映画界で働く女性を応援する確固とした土台を作りたい。未だにその目的は達成されていませんが、引き続きこの映画祭が、女性の活躍への手助けとなればと思っています。